



図 11. 萎凋細菌病抵抗性野生種 *Dianthus capitatus* ssp. *andrzejowskianus* (左) および抵抗性中間母本、カーネーション農 1 号 (右)

萎凋細菌病抵抗性育種 *Burkholderia carthophylli* (旧学名: *Pseudomonas carthophylli*) によって発生するカーネーション萎凋細菌病は、夏の高温期に発病が多発する立ち枯れ性の土壌伝染病害であり、日本でのカーネーション栽培上最も重要な病害とされている。日本では一九六四年に神奈川県秦野地方で最初に発病が報告され、病原となる細菌が分離同定され、萎凋細菌病と命名された⁽¹⁾。また、静岡県でも一九六九年に発病が認められ、一九七一年からは本格的な被害が発生している⁽²⁾。一九七〇年代には全国のカーネーション産地で被害が発生し、被害面

1 農研機構野菜花き研究部門における育種研究
農研機構野菜花き研究部門(旧・花き研究所)ではカーネーションにおいて、花持ち性、病害抵抗性、DNAマーカー利用育種など、民間ではなし得ない育種技術の開発、先導的パイロット品種の開発や、優秀な国産品種育成のための育種素材の開発を行ない、これまでに中間母本一品種、実用品種四品種を育成している。

品種などであり、引き続きオランダやイタリアなど海外の種苗会社育成品種が導入されて、国内の切り花生産が行なわれた。その一方で、国内でもさまざまな品種改良が取り組まれた。

二〇世紀後半からの改良技術・育成者の多様化

平成期(一九八九年以降)の主要品種はスタンダード系ではフランセスコ、ピンクフランセスコなど、スプレー系ではバーバラ、テツシノとその枝変わり

サカタのタネでも高木誠らが一九九〇年頃からカワラナデシコの切り花用F₁品種開発に取り組み、一九九七年にミーツィアシリーズ、フォトンシリーズを育成している。前者はカワラナデシコ選抜系統どうしの交雑品種、後者はヒゲナデシコとカワラナデシコとの種間交雑品種であり、フォトンピンクは二〇〇〇年にメロディーピンクの品種名でオールアメリカセレクションズに入賞している。

に大文字ナデシコ初のF₁品種ミスピワコを育成した。また、一九九〇年にカワラナデシコとヒゲナデシコの種間交雑により、白からピンクに色変わりする切り花用F₁品種、初恋を育成した。伊藤秋夫らは、花壇用ダイアンサスの育種でも成果を上げ、ヒゲナデシコとセキチクの種間交雑F₁品種テルスターを一九八二年に育成している。通年出荷できる優れた四季咲き性品種として、発売以来現在まで販売され続けている。



図 10. ダイアンサスタイプの小輪一重咲き品種、楊貴妃



図 9. スカーレットベル
提供: ミヨシ 羽田野昌二